

CIEC 第 90 回研究会報告

テーマ：震災と情報モラル(震災を経験して私たちは何を学んだか)

日 時：2011 年 5 月 29 日(日) 10:00 - 13:00

場 所：札幌学院大学 C 館 4 階

参加者：34 名

はじめに小中高部会の福島先生より、この研究会の開催趣旨の説明があった。この研究会は、3.11 の震災を受けて、「メディアリテラシーとは何であったのか」を問い直すために企画された。具体的には、次にあげる 4 つの課題からこの研究会で考える、1 つ目として、インフォーマルな情報の信頼性が高まったことがあることなどから、「情報の確からしさとは何か」、2 つ目としてチェーンメールや初等中等教育では良く評価されていないソーシャルメディアの重要性が明らかになり、「情報モラルで『悪』といわれていたものが、震災では影響を持っていた」こと、3 つ目として、「この震災を通じて私たちは本当に子供たちを見てきたのか」ということ、4 つ目として、「私たちが今まで情報教育の中で教えてきたことを正しかったのか」という、今までの教育内容を問い直す視点である、とした。



これらの課題を受け、千葉大学教育学部の藤川大祐教授に「震災とメディアの活用～リテラシーと情報支援を中心に～」というテーマで講演をいただいた。藤川氏は、震災前に自分でやってきたこととして、大学生だけではなく、高校生にも「ディベート甲子園」などを通して、メディアを積極的に使うことを訴えかけてきた。その後、3.11 の震災を受け、3 月 13 日には、自身のブログで全国の小中高等学校の先生方に向けて、「地震の後、学校で考えてほしいこと」として、「この震災が何もなかったように振る舞うのではなく、あったことを語り合う大切さ」を伝えてきた。またこの間の他の先生や子供たちの発信した内容やテレビの報道メディアの問題点などについても説明を受けた。さらに自分の大学の学生が行っている「SAVE TAMURA」の活動を通して、学生や被災者の望んでいることやその対応を通しての変化などについても語っていただいた。この震災を通じて、被災に関する「情報支援」という観点が必要であり、メディアに関する教育については再構築が必要である。常に前を向いて対応していこうとする態度やメディアを積極的に活用しより良い状況を作



っていくことが重要であると説明された。

実践報告では、阪神淡路大震災の際に実際に被災の経験を持つ神戸国際大学附属高等学校の大木先生より、その頃の情報インフラのみ整備の状況や「こころのケア」などが十分に行われていなかったことなどの反省を元に教員がこの震災をどのように扱うかが重要であることが語られた。またこのような非常時にこそ教師のリーダーシップも発揮されており、教師に問われている能力を考え直す必要があると語った。また千葉県立袖ヶ浦高等学校の永野先生からは、震災時に爆発火災事故のあった千葉縣市原市の石油コンビナートに関するデマメールについて、また固定電話が通じない場合の連絡、公式な情報を探す難しさ、非公式な情報の選別についての問題点などについて語られた。さらにこの会には欠席だったが、福島県の小野浩二先生からは美術雑誌「美育文化」に寄せた今回の震災に関する記事について資料提供があり、札幌旭ヶ丘高等学校の高瀬先生より詳細な説明と Facebook における小野先生の報告などについての紹介があった。

討論では、CIEC の海外視察に言ったメンバーからは、米国でのこの震災に関する報道の状況が語られた。また北海道の学生さんなどからは地震の影響の少なかった北海道での受けとめ方などについても語られた。神戸の大木先生からは、阪神大震災の際に、このような大きなことが起こっても、その地域以外の方からは実感を持たれなかったことに当時は不快感を持ったが、今回の震災では共感を感じたとの感想があった。北海道文教大学の曾我先生からは、「私たちは情報に何を求めているのか。」との問いかけがあり、この震災を情報を改めるよいきっかけにしなければならないという意見が出された。酪農学園大学の森先生からは、今の若者は一部のメディアに頼っている。いま必要な力は、コンピュータを使えることではなく、いかに生きていくのかを考えるための情報活用能力であるとの意見が出されました。その他にもたくさんの意見が出されましたが、最後に藤川先生からまとめとして、報道は必要であるが、その多くは東京を中心に作られており、それらの情報を批判的な思考で、判断する必要があること、情報を流さないのではなく、ネットを使ってどれだけ影響力のある発信が行えるかが重要であり、それを考えることが必要であると、締めくくった。

文責：大橋真也（千葉県立船橋啓明高等学校）